



目次	
貴重書紹介《嵯峨本『龍田』(古活字版)》p.1
伝説「羽衣」の天女と碧眼の天女	旧清水市長 宮城島弘正.....p.2-3
図書館からのお知らせp.4

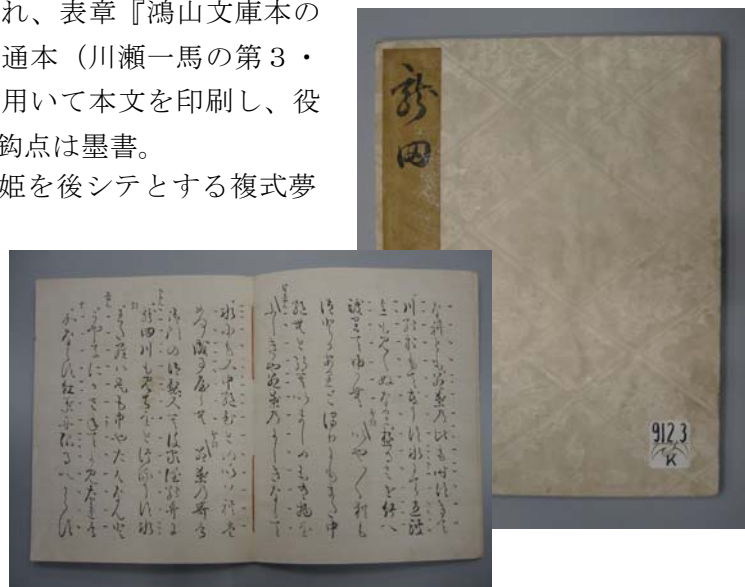
嵯峨本『龍田』(古活字版)

旧清水市長で静岡市副市長も務められた宮城島さんが能に関するエッセイをお寄せ下さった。そこで今回は、能の詞章である謡本(謡曲)の名品を紹介したい。

菱十字唐草刷り雲母文様の華麗な表紙(縦24.0、横18.1糎)、左端に押発装あり。表紙左肩に朽葉色原題簽(縦10.9、横3.0糎)を押し「龍田」と光悦風の書体で印刷。見返し、本文共紙。本文料紙は具引きした精良な厚手斐紙を用い、版本には珍しい列帖装とする。2ククリ墨付き12丁、遊紙なし。この種の謡本では、分量を問わず各冊2ククリ仕立てが定式。印刷後、各丁ごとに重ねて保管した痕跡が1丁オモテ・同ウラ・6丁オモテ・7丁オモテ・同ウラ等に残る。また4丁オモテ4行目「みち」2文字分は紙面が荒れており、誤植を削去し訂正したものと思われる。

慶長(1596~1615)年間、本阿弥光悦及びその周辺の手により制作された豪華本を「嵯峨本」と呼び、料紙・表紙文様・印刷・装丁等、あらゆる面で善美を尽くした嵯峨本のうち、多彩を極めるのが掲出本「龍田」を含む観世流謡本である。我が国出版史上最も美しい書物のひとつとされ、表章『鴻山文庫本の研究』の分類に従えば上製普通本(川瀬一馬の第3・4種)。光悦風書体の活字を用いて本文を印刷し、役名・節付等も活字で刷るが、鈎点は墨書。

「龍田」は、秋の女神龍田姫を後シテとする複式夢幻能で、「龍田川紅葉みだれて流るめりわたらば錦なかやたえなむ」(古今集)と「龍田川もみぢばとづる薄氷わたらじそれもなかやたえなむ」(壬二集)の2首を軸に構成、紅葉を賞美し国土安穩を祝してめでたく曲を閉じる。作者は金春禅竹。



伝説「羽衣」の天女と碧眼の天女

旧清水市長 宮城島弘正

あらゆる意味で日本一の名山富士を背景にした三保の松原で、今年もまた10月8日（土）薪能「羽衣」が演じられます。当地の素晴らしい景観が、天女をして舞い降りしめたという伝説にもなったのですが、まさにその天女が羽衣をかけたといわれる「羽衣の松」を鏡板の松にした能舞台は、他に類のないものであります。暮れなずむ秋の日、月の差し始めた中に燈される篝火、ここで演じられる世界は言葉には尽くすことが出来ません。

ここ三保で能「羽衣」が上演されるようになったのは、もう半世紀以上も前の出来事にさかのぼります。それは、フランス人バレリーナ、エレーヌ・ジュグラリスという舞姫の存在があるのです。彼女は「現代舞踊の母」といわれたイサドラ・ダンカンに早くからバレエを学び、舞踊家として成長していくのですが、その過程で「もっと優美でしかも奥深いもの」に惹かれてゆきます。これにはジャーナリストで、後に長く日本に赴任・滞在することになる彼女の夫マルセル・ジュグラリス氏の影響もあったようです。

「羽衣伝説」に通ずる「白鳥伝説」は彼の地にも数多く伝わるようですが、その中でもエレーヌはとりわけ日本の能「羽衣」に魅せられて、この上演に情熱を傾けるのです。そうはいっても時代はまだ第2次大戦後の混乱期、日本との国交もないフランスには、能など見たことのある人は皆無といっていくらいでした。大使館も領事館もない中で、資料集めは困難を極めるものでしたが、夫マルセル氏はじめ、資料集めのために通い続けた図書館や博物館で出会った数少ない日本研究者、能の翻訳家などの助力も得て、能上演のための知識を深めていくのでした。

彼女は、マルセイユ入港の船から手に入れた謡曲「羽衣」を五線譜の上に置き換え日本語の詞をフランス語の謡になおし、能面や衣裳を当時のお金で1万フランという大変な散財をして調達したのでした。さらにはフランスの元日本大使館付き武官で、能について詳しく人の協力を得て笛や太鼓も買い求め、ギメー博物館内の劇場公演にこぎつけたのでした。この初演には千人余りもの観客を集めて大成功を収め、その後も各地で何度かの再演を果たすのですが、ここまでにいたる大変な苦労が彼女の体を蝕み、35歳の若さで帰らぬ人となります。

彼女の夫マルセル・ジュグラリス氏は、妻が一度は行って見たいと最後まで望ん



(羽衣まつり二十周年記念誌より)

でいた三保の地を、エレーヌの遺髪を持って訪れます。これが昭和 26 年 11 月のことでした。おそらく氏の胸中には、この貧しい時代に妻と二人、公演実現のために払ってきたさまざまな事象が去来していたに違いありません。

実はこのことが、敗戦によって打ちひしがれ、貧しさの中ですっかり自信を失っていた当市、地域の人々に大きな感銘を与えてくれました。そして当時の清水市長は、地元三保の人たちを初め多くの方々から善意の寄付を集め、日仏文化交流の象徴として昭和 27 年 11 月、「エレーヌ・ジュグラリス・羽衣の碑」を建立したのでした。ここには舞姫エレーヌの遺髪が納められ、彫刻家朝倉響子の手になる彼女のレリーフがはめ込まれています。この完成記念日には当時のフランス大使や大野伴睦衆議院議長が臨席され、後に人間国宝となった梅若万三郎が能「羽衣」を舞いました。

その後わが国は昭和 30 年代の高度成長期を経て、ひたすら経済発展への道を突き進むこととなります。当地には、この間に私たちがどこかに置き忘れ、失ってきた地域文化やそれへの思い入れを掘り起こして、町の活性化につなげようという運動が、昭和の 50 年代になって起こりました。その中の一つの提案に「薪能公演」があり、昭和 59 年、主唱者達と多くの協力者の手によって実現しました。爾来これが当市を代表する文化イベントとなり、関係者のご努力で毎年同じ時期に催されてきて 20 年になりました。

いうならばエレーヌは、フランスから三保に舞い降りた青い目の天女です。この青い目の天女の思いをうけて催される薪能に、ぜひ皆さんも一度お出かけください。松原と渚と潮騒の中で、本物の「羽衣」を味わっていただきたいものです。なお、50 年以上も前に、彼女がパリで上演したときの能面や衣裳、楽器、そして何よりも彼女が謡曲「羽衣」を五線譜に置き換えたもの、などなどを、市がマルセル氏より寄贈を受け、清水中央図書館に展示紹介しておりますのでご覧ください。



(写真：旧清水市教育委員会社会教育課所蔵)

終わりに「羽衣の碑」に刻まれたマルセル・ジュグラリス氏の詩を紹介して筆を擱きます。

三保の浜辺を渡る風は 遙かな パリの都で
羽衣と共に逝ってしまった ひとを思い出させる
いま私の命が消え去ってしまっても 悔いはない

(ミヤギシマ ヒロマサ)

図書館からのお知らせ

企画展紹介

鶴見大学図書館では、年間を通して貴重書展と企画展を行っています。

貴重書展は、普段見ることのできない古典籍などの資料を展示します。企画展は、貴重書展よりも小規模な展示です。図書館の書架に普通に並ぶ本を抜き出して展示します。貴重書展・企画展を行うことで、展示スペースの有効活用にもなります。

企画展のテーマは、学部学科に関するもの、学生生活、社会の話題となっているものなどを基本として企画します。また、直接手に取って、見て、借りてもらえるよう、図書館の貸出利用促進の目的もこめています。

これまでに行った企画展は、11回です。内容は、学内刊行物、視聴覚資料、夏目漱石の本、個人文庫紹介、ピアトリクス・ポターとピーターラビット、図書館員おすすめ本100冊、原装復刻のあれこれ、人生と職業に関する本100冊、日常を楽しむ100冊、現代日本の絵本作家100冊、です。

2004年度は、貸出もできる本の展示のために「100冊」を目安に本を選定し、多めに展示することを念頭において行いました。

6月	「人生と職業に関する本100冊」	152冊展示	延べ	39冊の貸出
8月	「日常を楽しむ100冊」	121冊展示	延べ	29冊の貸出
10月	「現代日本の絵本作家100冊」	116冊展示	延べ	137冊の貸出

2005年度においては、第11回の企画展「人生と職業に関する本」(6月22日～7月20日)を再び行い、前回展示していなかった本を中心に、就職関係の雑誌・新聞記事なども展示しました。

また、今回の第12回企画展として、7月26日から8月31日まで「源義経展」を行っています。今後の予定として、「生誕200年記念のアンデルセン」に関する展示、「東西の陰陽道」などの占術関係の歴史についての展示を企画しています。

アゴラ — 鶴見大学図書館報 — 第118号 2005年7月26日発行

編集・発行 鶴見大学図書館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 Tel:045-580-8274 Fax:045-584-8197

鶴見大学図書館ホームページ <http://library.tsurumi-u.ac.jp/library/>